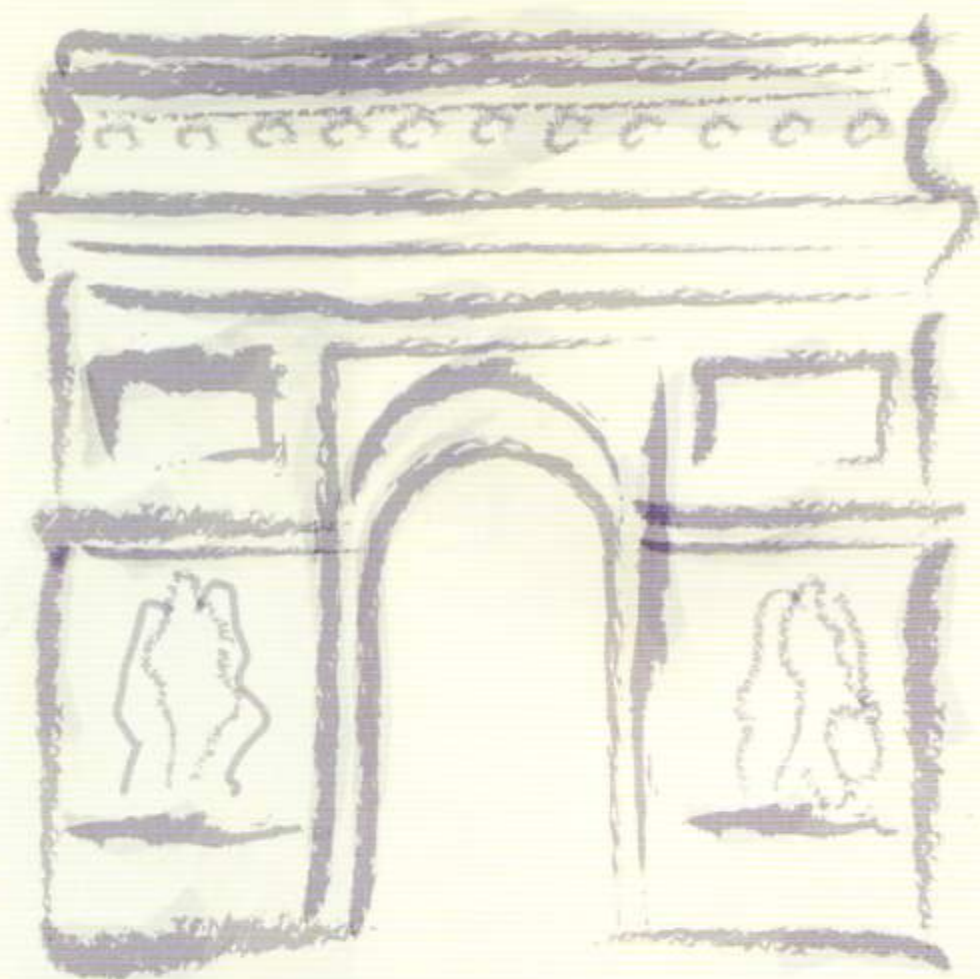


フランス語を知る、ことばを考える

石野好一

著

Koichi Ishino



朝日出版社



目次

はじめに

1. フランス語はラテン語か？	1
2. 英語はフランス語になっていたかもしれない？	7
3. なぜ80は 4×20 か？	13
4. フランス語の音はいくつあるか？	17
5. なぜフランス語の音の印象は、スペイン語やイタリア語と違うのか？	23
6. リエゾン、アンシェヌマン、エリズィオンはなぜあるのか？	31
7. 文とイントネーションの関係は？	35
8. なぜ尻上がりイントネーションは疑問文になるのか？	41
9. 名詞の性はどのようにしてできたのか？	43
10. 名詞の性はどのようにに区別するか？	49
11. 冠詞はなんの役に立つのか？	53
12. 形容詞の性は必要か？	61
13. 形容詞は後ろか前か？	67
14. « de + 形容詞 + 名詞 » の de は何か？	75
15. 動詞には手がある — 文型とは何か？	79

16. 間接他動詞とは何か？	83
17. 主語は必要か？	87
18. SVO 言語？「もつ」言語？「する」言語？	89
19. 代名動詞？	95
20. 代名詞はなぜ前に出るか？—語順と情報	97
21. なぜ否定は ne... pas なのか？	105
22. なぜ否定で de になるのか？	111
23. なぜ倒置が疑問になるのか？	115
24. Qui est-ce qui...? とは何か？—部分疑問文のしくみ	121
25. なぜ命令法には主語がないのか？	127
26. 受身文はなぜ存在するか	133
27. フランス語には未来がある？—時制のしくみ	139
28. なぜ助動詞に être があるのか	145
29. なぜ « 助動詞 avoir + 過去分詞 » が一致するのか	149
30. 叙法とは何か	153
31. 接続法と条件法はどう違うか	157
●参考文献リスト	164



1. フランス語はラテン語か？

フランス語は、ラテン語が変化してできた言語だと言われています。

同じようにラテン語からできた言語といわれるものとして、イタリア語やスペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語などがあることはよく知られています。つまり、これらの言語はラテン語が分裂〔分岐・派生〕してできた兄弟〔姉妹〕言語だというわけです。

このような言語を〈ロマン(ス)語〉とか〈ロマン(ス)諸語〉などということがあります。「ローマ帝国下の(さまざまな)言語」という意味です。(以下「ロマン語」とします。)

ロマン語には、他に、オック語、カタロニア語、ガリシア語、コルシカ語、サルディニア語、シチリア語、ロマンシュ語などを挙げることができます。

フランス語はロマン語？

これらの言語には、語彙の似ているものがたくさんあります。例えば、「父」をフランス語では *père* [ペール]、イタリア語やスペイン語では *padre* [パードレ] といいます。ラテン語の *pater* [パーテル] も含めて、よく似ていることがわかります。

同様の例をいくつか挙げてみましょう。

	「父」	「一」	「手」
フランス語	<i>père</i> [ペール]	<i>un</i> [アン]	<i>main</i> [マン]
イタリア語	<i>padre</i> [パードレ]	<i>uno</i> [ウノ]	<i>mano</i> [マノ]
スペイン語	<i>padre</i> [パードレ]	<i>uno</i> [ウノ]	<i>mano</i> [マノ]
ラテン語	<i>pater</i> [パーテル]	<i>unus</i> [ウヌス]	<i>manus</i> [マヌス]

このように言語間の類似点を調べて、その系統をさぐり、おおもとの言語(〈祖語〉)を見つけようという研究を〈歴史比較言語学〉といいます。



しかし、ただ似ているというだけでは、たとえ何百語を集めたとしてもだめです。借用語ではなく古くからある〈基礎的な語彙〉を取り上げ、これらが言語間で規則的に音の対応をしていることを証明しないとイケません。

こういう過程をへて、フランス語は、ロマン語の一つであるということが（直感的にではなく）いえるようになりました。

フランス語はラテン語らしくない？

しかしながら、実はフランス語にはラテン語らしくない点がよく見られます。例えばラテン語の文法的特徴としては、次のような点が挙げられます。

1. 冠詞がない。
2. 名詞に格変化があり、機能（はたらき）によって語形が変わる。
3. その結果、語順は比較的自由である。
4. ただし、動詞は最後に置くのが標準的である。
5. 主語代名詞はあまり用いられない。

ところがフランス語では、これらがすべて反対になります。すなわち、

1. 冠詞がある。
2. 名詞に格変化はない。
3. 語の機能は語順であらわすため、語順に自由が少ない。
4. 動詞は主語の後、文の前の方に置く。
5. 主語代名詞は原則として省略できない。

この点では、イタリア語、スペイン語も、フランス語とおおむね同様なのですが、ただ、5の主語の省略はイタリア語、スペイン語ではごく普通のことなのに、フランス語だけはできません。

また上の語彙の比較を見ると、確かに類似性は無視できないものの、ラテン語や、両隣のイタリア語、スペイン語と比べて、フランス語は発音や語形（特に語尾）の様子が異なるという印象をめぐえません（→詳細は別項5）。

つまり、フランス語は、ラテン語や他のロマン語と比べてもやや違う面があることがわかります。

フランス語はどのように成立したか

いったいこれはなぜなのでしょう。それはフランス語の生い立ちや成立のしかたに理由があると考えられます。

フランス語はどのように成立したのでしょうか。そこにはいくつかの言語がかかわっています。つまり、フランス語はラテン語が時間とともに自然に変化しただけの言語ではないのです。

まずガリア語（ケルト語）

ラテン語がもたらされる以前、紀元前 2000 年頃、ガリア地方（今のフランスあたり）にはガリア人（ケルト人）が住み、ガリア語（ケルト語）を話していました。この状態が 2000 年ほど続きます。

つぎにラテン語

そこに紀元前 50 ～ 60 年ごろ、ラテン語を話すローマ人が侵攻して来ます。するとガリア人はローマ人と同化しながら支配者の言語であるラテン語を話すようになっていきます。

しかしガリア語もなかなかしぶとく、次の支配者が来るまでラテン語と共存します。こうしてラテン語にガリア語の影響が加わっていくのです。

そしてゲルマン語

次にそこに攻め込んできたのはゲルマン民族です。4～5 世紀のことでした。ところが、この新しい支配者たちは、自分たちの言語であるゲルマン語を押しつけず、自発的にラテン語の文化に同化していくのでした（→次項）。こうして被支配者の言語であるラテン語がそのまま生き残りました。と同時に、ゲルマン語のなまりがラテン語に加わっていきます。こうして俗化したラテン語がフランス語になっていくのです。842 年に発見された〈ストラスブールの誓約〉は、フランス語らしくなった形を示す最古の文書です。

以上の流れを図にして見ましょう（図 1）。この図は一番下のラインから見ていくと分かりやすくなっています。



(図1) フランス語の成立の流れ



フランス語はサンドイッチ?

先住民のガリア語は、結局、最後は消滅したものの、後からガリア地方にやって来たラテン語に発音、語彙、文法、表現などの面で影響、変化をもたらすことになりました。このような先着、先住の言語を「基層言語」といいます。

そしてガリア語を基層として支配言語となったラテン語に、さらに後から覆いかぶさるように影響を与え、変化を加えることになったのがゲルマン語でした。このように後からやって来た言語を「上層〔表層〕言語」といいます。

つまり、フランス語は、成立の過程で、ガリア語ーラテン語ーゲルマン語の三層構造になりました。ラテン語を中心に見れば、下のガリア語、上のゲルマン語にはさまれたサンドイッチ構造になっているわけです(図2)。

(図2) フランス語の基層・上層

ゲルマン語	……上層〔表層〕
ラテン語	
ガリア〔ケルト〕語	……基層

後はトッピング?

こうして10~11世紀になると、ガリア地域がゲルマン系のフランク族によってまとめられ、それに合わせて、フランス語も整っていきます。そして16世





紀には、さらにギリシア語、ラテン語、イタリア語の語彙が採り入れられ、フランス語に豊かな表現力が与えられることとなります。いわばサンドイッチの上にトッピングがほどこされるような格好になりました。

フランス語は混合言語？

このように、ガリア地域のラテン語は、それ以前のガリア語、後続のゲルマン語という2つの言語の影響を受けました。その結果できたのがフランス語というわけです。そのため、比較的ラテン語らしさを残すイタリア語と違って、フランス語は〈混合言語〔クレオール〕〉だと言われることがよくあります。

このようなフランス語の生い立ちは、必ずしも他のロマン諸語と同じではありません。イタリア語は他言語の影響が比較的少なく、スペイン語は南からアラビア語の影響をかなり受けています。

こうして、ガリア地域の特殊性が、その後のフランス語やフランス語文化にさまざまな痕跡を残し、ラテン語や他のロマン諸語とは異なった様相を呈する原因となったのです。

